



研究集録45

神戸大学附属特別支援学校研究推進委員会

(Citation)

研究集録, 45:0-24

(Issue Date)

2019

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012826>



2018年度研究・実践

「コミュニケーション的關係がひらく障害児教育」
～生活・集団・内面・発達と障害をとらえなおす～

神戸大学附属特別支援学校

遅ればせながら教員への大学院研修保障が始まりました

校長 渡部 昭男
(神戸大学教授)

大学卒業と同時に教職に就いたとすれば、22歳から60歳までの40年近く、勤め続けることになります。実践研究を深めるには、採用から定年までの間を「絶えず研究と修養に励み」（教育基本法第9条）、専門職として成長していくことが肝要です。

神戸大学には附属学校教員の大学院研修制度（内地研修制度）がありますが、研修に出ている間の現場の体制補充の困難さ等の諸事情から、本校では研修の機会を見送ってきました。併任校長の3年間でできる（できた）ことには限りがありますが、2016年度の着任にあたり、なんとか一歩前に進めたいと思ったのが、この大学院研修制度でした。

神戸大学の大学院研修制度は、大学院修士課程に2年間学んで修士号を取得するというもので、附属学校教員の専門性の高度化策でもあります。この制度を活用して、附属中等教育学校では大学院に2年間通っての研修が、附属小学校では1年目は大学院に通い2年目は現場に帰って修士論文を執筆する形の研修が行われています。

附属特別支援学校は教員数も多く、できるだけ多くの先生に機会を与えて、修士号取得者数を増やしたいと考えました。副校長先生や附属学校部とも相談のうえ、神戸大学大学院人間発達環境学研究科にある「発達支援1年履修コース」（1年間で修士号が取得できる）を活用する方向が見えてきました。そのコースのご担当であった津田英二教授にまずご挨拶にうかがい、入試合格の結果をうけて2019年度に最初の研修生を送りだせることになりました。当面の計画では、2019年度から4年間連続で毎年度1名ずつを派遣予定です。

こうして、遅ればせながら、教員への大学院研修保障が始まりました。研修の成果は、学校全体と子どもたちに還元されてこそ意味があります。実践研究のさらなる発展と深化を期待しております。

も く じ

はじめに	学校長 渡部昭男	1
目次		2
1. 2018年度研究推進活動の実際とまとめ		
研究推進委員会の報告		
研究推進委員会の総括	殿垣 亮子	5
2. 各学部の教育と研究の実際とまとめ		
[小学部の研究と実践の報告]		
教育課程と集団編成、児童の障害と発達の状況	大竹 由美	2 5
研究と実践の報告	柴田真砂代	2 8
テーマ「人と豊かに内面を育む小学部教育を探る」		
〈実践報告〉		
・ことばかずあそびBグループ		
[かずへ向けて ～色と形から～]	平沢 崇	3 7
・えがく・つくる 1組「紙粘土を使った実践報告」		
～何を作るかではなく、素材にどう働きかけるか～	島田 武	4 2
・運動会 「あっちへ こっちへ うきわシュート」の取り組み		
～子どもの動きから思いを読み取る～	湯山 君恵	4 5
・療育「リラックスを探る」～動作法を中心に～	岡本 政隆	4 9
・事例研究「Kの遊びづくりを通して、見えてきたこと」		
～その子の感覚は、その子のものである～	長谷川聡一郎	5 1
・事例研究『自己感覚を尊重した排泄指導を探る ～Jの事例研究から』	柴田真砂代	5 4
教育課程編成上の諸課題	大竹 由美	5 8
[中学部の研究と実践の報告]		
教育課程と集団編成、生徒の障害と発達の状況	佐藤 知子	6 5
研究と実践の報告	殿垣 亮子	6 7
テーマ「中学部時期の生徒の自分づくりについて探る」		
—キーワード「個と集団の変容」「授業づくり」—		
〈実践報告〉		
・学級活動3組 クラス集団作り～風船バレーが繋ぐ絆～	高岡 聡	8 5
・学部活動「ゲームを通しての集団づくり」		
～文化をどう伝えていくのか～	北村 映子	9 2

・国語数学基礎Cグループ「ロボットカミイの実践」			
～劇あそびを通して「友だち」「自分」に気づく～	金川 実奈	-----	9 7
・美術Iグループ 美術の目的意識～楽しいを広げて～	高岡 聡	-----	1 0 1
・家庭科II グループ主体的な調理活動とは			
～卵調理を通して調理の手ごたえを探る～	豊田 とわ	-----	1 0 5
・しごと（陶工）ミニテーマポールづくり			
～だんだんとうまくなっていくことを感じる			
ものづくり～	小山 紗知	-----	1 0 9
・「ラグビー～レッツトライ2018～」			
～3年目の運動会実践から～	備瀬 雄太	-----	1 1 2
・「中学部演技 ロープパフォーマンス」	殿垣 亮子	-----	1 1 8
・心震える音楽との出会いを			
～合唱と中学部音楽劇「魔法の笛と魔法の鈴」			
の取り組み～	佐藤 知子	-----	1 2 5
・教育課程編成上の諸課題	佐藤 知子	-----	1 3 1

[高等部の研究と実践の報告]

教育課程と集団編成、生徒の障害と発達の状況	-----	本田 旭	-----	1 4 1
研究と実践の報告	-----	岡宗 文華	-----	1 4 3
テーマ「豊かな人格発達を目指す高等部教育 ～仲間とともにすすめる自分づくり～」				

<実践報告>

・高等部1組学級活動「作って、踊って、楽しもう」	-----	杉本 憲章	-----	1 5 4
・高等部2組学級活動				
「みんなが手応えを感じて楽しめる教材を探して」	-----	竹川 幸介	-----	1 6 5
・高等部3組「一人ひとりが輝き、認め合える学級集団づくり」				
～学習発表会「アラジンと魔法のランプ」				
の取り組みを通して～	-----	江上 弘晃	-----	1 7 0
・「生産学習」Ⅲ班（陶工）				
「作る楽しみからプレゼントする楽しみに」	-----	杉本 憲章	-----	1 7 4
・課題別学習Aグループ家庭科				
「自分で作り上げる手応えや				
達成感を味わう調理活動」	-----	下木なつみ	-----	1 8 3
・課題別学習Dグループ美術				
「豊かに生きるために表現するということ」	-----	霜浦 桃子	-----	1 8 7
・高等部学習発表会の取り組み				
『歌・合奏「Joyful・Joyful」、歌「花は咲く」』	-----	井上 万紀	-----	1 9 2
教育課程編成上の諸課題	-----	本田 旭	-----	1 9 8
地域施設の見学と懇談及び進路を取り巻く情勢の報告	-----	黒川 陽司	-----	2 2 1

3. その他の実践報告

・わくわく給食（オードブル給食）の取り組み	-----	2 2 5
-----------------------	-------	-------

4. 校務部活動、委員会活動報告

教務部報告	-----	菅田 恭巳	-----	2 2 9
指導部報告	-----	北村 映子	-----	2 4 0
総務部報告	-----	備瀬 雄太	-----	2 4 8
地域連携部	-----	湯山 君江	-----	2 5 4
進路指導委員会報告	-----	松永 芳博	-----	2 5 9
保健委員会報告	-----	西堂 直子	-----	2 6 7
		松本 早苗	-----	2 6 8
入学選考委員会報告	-----	西堂 直子	-----	2 6 9
情報委員会報告	-----	江上 弘晃	-----	2 7 2
将来計画検討委員会	-----	西堂 直子	-----	2 7 5
学校創立50周年記念行事实行委員会の報告	-----	松永 芳博	-----	2 7 9

おわりに	-----	殿垣 亮子	-----	2 8 4
------	-------	-------	-------	-------

教員一覧

2018年度研究推進活動の 実際とまとめ

2018年度 研究推進委員会の報告

1. 研究主題について

●研究主題とサブテーマ

「コミュニケーション的関係がひらく障害児教育」
～生活・集団・内面・発達と障害をとらえなおす～

2. テーマについて

(1) コミュニケーション的関係とは

2005年に当時校長だった二宮先生の指導と助言のもとに社会哲学者ユング・ハーバースの理論を学び、それまでの教育実践を「コミュニケーション的関係がひらく障害児教育」としてまとめ、出版した。それ以来、この研究テーマを引き継いで教育研究と実践に取り組んできた。今年で13年目である。

教育活動には学習の主体（子ども）と教育の主体（教師）の二つが存在している。この二つの存在の間にコミュニケーション的関係に基づく合意理解がないと教育実践は進まない。コミュニケーション的関係とは、互いの違いを理解し尊重しながら共通の目的に向かって相互に合意をつくっていくという関係をいう。本校ではコミュニケーション的関係を教育活動の全てにおいて大切にしようと努めてきた。

コミュニケーション的関係の土台となるのは、対等・平等な人間関係である。この関係は、子ども同士だけでなく教師と子どもにも当てはまる。具体的に言えば、教師は子どもの意見表明権を大切にしなければならない。コミュニケーション的関係を積み上げながら、子どもと一緒に教師も育っていくという姿勢が必要なのである。教育実践を通してお互いの違いをわかり合い修正しながら合意理解を創っていくことで、教師と子ども、子ども同士の関係づくりが進み、教育実践も深まっていく。教師も子どもも学校生活の主体として生きることが大切なのである。

(2) 今年度の教員集団

本校ではこの数年、教員の入れ替わりがはげしくなっている。本校に長く勤める教員が多い状況が続いていたのだが、本校での経験が長い教員が退職していき、新しい教員が増えるという世代交代が進んでいる。今年度は、継続の非常勤講師を含めて6名の新しい教員を迎えた。また今年度は学部をまたがった教員の移動があり、どの学部も新しい顔ぶれで新学期をスタートさせた。そこでは、新しく赴任した教員の疑問やあらたに学部を入れ替わった教師の「気づき」が得られるであろう。新しい教員が増えて世代交代の時期になっている今、本校で「大事にしてきたこと」を丁寧に継承しながら、新しい視点を得て、さらに実践を発展、充実させていくことが課題となっている。

(3) 今こそ教育にコミュニケーション的関係を

インクルーシブ教育や、障害者の権利条約等の人権に関する条約を学ぶ中であらためて感じるのは、コミュニケーション的関係の大切さである。子どもたちが自分の人生と社会の主体として、それぞれの多様性を尊重されながら、その個性と能力を発揮して生きるためには、インクルーシブな社会が不可欠である。

どの子も排除されない学校、授業を創っていくためには、お互いの違いを理解し認めあい、その上で共に享有できる教育システムと教育内容をつくっていくことが必要であり、コミュニケーション的関係が土台とならなくては実現できないだろう。そこでは、子どもたちの意見表明権を大切にしたい、対等平等の人間的な関係づくりが決定的な要因となる。

本校の小学部の「自我」や中高の「自分づくり」では、大人とのコミュニケーション的関係が土台となっている。そして、豊かな教育内容を創り出すためには、このコミュニケーション的関係を土台に文化や科学や芸術を享受していく実践的な取り組みが大切である。学校を子どもと教師双方にとって、お互いが尊重される楽しい充実した場にしていくことが必要なのである。

3. 今年の学部研究の特徴

(1) サブテーマ 生活・集団・内面・発達と障害をとらえなおす

さて本校では「コミュニケーションの関係がひらく障害児教育」というテーマのもとで、小学部では自我の育ち、中学部では自分の捉え直し、高等部では自分づくりに課題意識を持って、学部ごとに教育研究を進めてきた。自我や自分づくりを進める中で大きな課題となったのが、人との信頼関係の構築と共感的自己肯定感の育成、他者と達成感・充実感のある活動を共有することである。今年度はどの学部も学校生活の拠点である「学級集団づくり」の研究を進めている。

(2) 学部の特徴と集団的な課題

小学部は今年度1年生2人、6年生に2人の新入生を迎えて14名の集団になった。1～4年生の低学年集団2クラスと、4、5、6年生で5名の高学年集団に基礎集団を編成し、合同授業、国数基礎の課題別集団、クラス集団と3つの集団で授業を行っている。大人との気持ちの結びよう、活動への気持ちの向けようを見ると、大人のどんなまなざしのもとで育ってきたかが、如実にでている。特に今年度の入学した6年生2名は、集団の中で安心してのびのびと自己表現する経験が小学校時代に積めておらず、まずは大人と安定した関係をつくること、生活づくりを進めていくことが課題となっている。他の子ども達は教師との信頼関係もでき、友だちのこともよく知っていてクラス集団に安心感を持っている。新入生が加わったことで、活気づき、人間関係も膨らんで、それがそれぞれの自己表現に結び付いている。より集団意識を高めることが課題となっている。

中学部は、発達年齢が3、4歳頃の発達の生徒たちが増え、7歳を過ぎた生徒たちが少なくなった。1年生から3年生までの縦割りの3クラス編成で学級集団をつくっている。それを拠点に「合同集団」（音楽・体育・運動・畑）と「国数基礎」、「家庭・美術」「仕事グループ」と、3つの課題別集団と、合計5つの集団で授業を行う。「国数基礎」と「家庭美術」は課題別なので、顔ぶれはほとんどかわらないが、他学部と比較しても「集団」の種類は一番多い。子ども達は様々な集団で友だちや教師と出会い、ひとりひとりがそれぞれの集団によって、またちがう顔を見せて学習する。固定された関係の中ではなく、ちがった人間関係を編みながら、多面的な自分を発揮して自己表現も豊かになる。全体としては教師との信頼関係を土台に仲間の活動に気持ちを向けて見て、やってみたいという憧れを膨らませている生徒たちである。提示された活動には一定の関心を向け、目的をもって取り組むことができる。友だちと一緒に活動を通して「あんな風にやってみたい」とあこがれたり、時には「うまくできない」と妬んだり、勝敗の行方にドキドキしたり、友だちを応援したり、それぞれの情感が豊かで集団的に響き合い高まるなど気持ちの渦が豊かにできている。その中で甘えも含めた大人との信頼関係を築きながら、充実できる活動をつくることを通して、自分の思いに気づき、要求をつくり、友だちとつながっていくことが課題である。

高等部は、発達年齢が3歳頃から12歳頃までと幅が広い集団で、比較的認識の高い発達障害の生徒が多い。1、2組が1、2年生の縦割り集団で、3年生が学校で唯一の単学年編成のクラスとなる。3年生（3組）は学校生活最後のしめくりとしての一年であり、卒業後の進路についての取り組みが要となる。

「クラス集団」、「合同集団」、「生産」と「課題別グループ」の4つの集団で学習活動を行う。

いじめや不登校、家庭の状況など、様々な問題に直面してきた生育歴から、自分に自信がなく人間関係の取り組みに困難を抱えている生徒もいる。相手の気持ち推し量ることが難しいこともあって、いったん人との関係がもつれると、お互いに気持ちを整理してやりとりすることが難しい面がある。青年期に入り異性への憧れや興味関心が膨らみ、勘違いや思い込みで一喜一憂してしまうこともある。自己意識がぐんと膨らんでいく時期なので、教師はそこでの自己表現に寄り添い、意味付けて生徒自身と仲間集団に返していくことが大切である。そこには教師の集団観や人間観が大事になる。またどこに自分の充実があるのかわからない生徒も多く、楽しい活動を積み上げて充実感や達成感を体験することが必要である。そうして、仲間と一緒にやりがいの感じられる活動に取り組む、自分を豊かに膨らませていくことが課題となっている。

以上のような各学部の実態から共通して読み取れる課題に次のようなものが考えられる。

- ・大人を中心に人との信頼関係を育み、大人に自分の思いを意味づけてもらって、自分の思いに気づき直し、自分の意思をはっきりさせること
- ・楽しい活動に取り組み自己充実を土台に、欲求を要求へ発展させていくこと
→自分を解放させていく

「行動や意志が抑制されていては正しい要求、つぎの発達にステップのための力となるような要求にはならない」「子ども達の意志や行動が抑圧されたまま内にある潜在的な力の発達は期待できない」

田中昌人

- ・自分の要求を実現させていくことを通して、友だちと出会い、つながっていくこと
- ・「仲間の中で自分がどうあるべきか」、また「仲間集団としてどうありたいか」集団の中の一員としての願いを持つ

発達は今までの自分の価値観を崩し新しい自分を築くことだといわれる。そこには自分と人への信頼と、今までの自分を崩すに足る価値ある活動との出会いが必要である。自分づくりと自分崩しを交互に進めていくことで、ありのままの自分でいていいのだと思える共感的自己肯定感をつくっていききたい。どの学部もその願いを持って、「学級づくり」「集団づくり」を進めているが、認識的に幅がある集団、それぞれが障害や生育からくる独特の感性を持っている子ども達の「集団づくり」はとても難しい。

本校は養護学校として産声をあげてから5年目で、クラス集団だけの学習形態から、いろいろの学習集団をつくり取り組むようになった。様々な生徒が入学するようになり、クラス集団だけでの学習にはいき詰まり、いろいろな学習集団で、広く人間関係をつくりながら学ぶことの意義に気づいたからである。それから、45年近くずっと、異年齢縦割り集団での学級編成や学部での合同授業、課題別授業というように様々な集団での学習を保障している。様々な集団をつくることの意味を田中昌人先生は以下のように述べている。近江学園での実践の回想録で白石恵理子先生がかいたものからの抜粋である。

「子どもたちは常に同じ集団で同じ指導者だけとむきあっていると、同じ「顔」しかつukれないようになる。いつも同じ顔をしていると、自分で自分づくりかえる発達のエネルギーは先細る。「世話をされているばかりの自分」、「自信のない自分」しか見いだされないようなことがあってはならない。一方で一見自信があるような風を装いながら、「相手に指示するばかり」「お世話するばかり」の子どもたちのもろさも容易に想像できる。質の異なる集団だからこそ、別の「顔」を作ることができ、自分や他者の認識も深まりを見せていく。指導者もみんなが同じタッチで同じ声かけでは指導のふくらみはでてこない。それぞれの個性や持ち味が生かしていけるような「多様な一貫性」が必要なのである。また指導者が自由な人格の発達と、専門としての力量が豊かに伸びていかなければ、貧乏な一様性になってしまう。 田中 昌人氏」

本校の学級集団は発達の状況も年齢もちがう異年齢の縦割り集団である。その中でどんな実践が行われたのか、なにが課題になっているのか、各学部の具体的な研究をこの後の報告でたっぷりきくとする。

研推としては、「学級の集団づくり」も含めて本校で大事にしている「子ども理解について」もう一度押さえておきたい。

4. 子ども理解 ～教師それぞれの「観」を捉え直しをしながら～

(1) 子どもを理解とは

子どもを理解とは、子どもを標本のように見て分析するのではない。子どもに共感をよせ、どんな世界を見えているのか、イメージを豊かに膨らませる想像する能力がいる。

子どもも教師も一人ひとりが、「独自の感覚」、「感性」を持っている。本校の子ども達は、発達段階もそれ

それで、障害からくる制約もあり、また私たちにはイメージしにくい、「独特の感覚」や「感性」を持っていて、その表現は様々である。独自の感性や感覚を大事にしてもらうことなしに、子どもは「自分を尊重された」とは感じられないし、「自己肯定感」を持つことができない。

子どもを理解しようと思えば「子どもはどう感じているのか」「どんなふうに見えているのか」「なにを大人に訴えようと思っているのか」など教師はイメージをふくらませて考えていくことが必須だが、思考を凝らしているだけではわからない。「子どもが夢中になる世界を一緒にやってみる」ことが大事である。子どもは自分の感覚をいっしょに味わおうとしている大人には、安心感を持てる。

本校の子ども達にはいろいろなところでつきあう教師がいる。「その子がこだわる楽しさ」が、大人の私たちに伝わったとき、本当の意味で共感ができる。あまりに独特すぎたり、あまりに突飛であったり自分にはない感覚で、「どこが好きなのか」「なにがいいか」わからないこともあるだろう。それでも「どこが楽しいのか」と探求心を持って取り組み、その楽しさがわかったときは大人の世界も広がる。自分を振り返ると様々な子ども達の「楽しいこと」と出会い、また「楽しいこと」を子ども以上に深めて楽しむ教師をみてきた。少し紹介する

（２）子どもの具体例

①子どもの楽しみを味わう

☆いしほりが大好きなNくん

Nくんは、自閉性障害の男の子。公園やグラウンドで石を掘るのが好き。なにかでスイッチが入り、「この石」と決めたら、土から抜けるまで掘り続ける。石の端を指でほじって石がぐらついてきたら、ぎゅっとつかんで左右、斜めとぐらぐら動かして取る。石は表面から出ているときは小さくても、地下にぐーんと潜っていて掘っていくと、とてつもなく大きいものもある。掘れるまでやりきりたいNくん、大人が手伝うのは拒まないが、最後まで掘りきれないと怒り出す。時間がきても切り替えられない。だから公園を散歩するときは「石をみつけている」まなざしを見て「今は行けない」と「石堀り行き」を阻止することもあった。石堀りにつきあうのは時間のあるとき。棒で掘っている私をみながら自分も棒を持ってくる。無になり土にむかうのがなんとも心地よく、私も夢中になった。表面と地下にもぐる対比もおもしろく、「大きいな」と思うと小さかったり、「ちいさっ」と思って掘っていると、すごく大きかったり、スコップ必要なこともあった。スコップなどをつかっているとクラスの子も達もやってきて、みんなで石堀りに熱中することもあった。そのうち、「あの石堀りたい・・・案外でかいかも！」など石をよく見るようになった。須磨浦山上公園の遠足では午後からの時間のほとんどを石堀りに使い、指にまめができるほどであった。クラスの子も一緒にやってきて、時々手伝っては遊びに行く。Nも気がつくとうだちについて行ってしまい私は一人の残されたけど、掘るまでやめられない。掘った後の爽快感。「石堀り」の楽しさにすっかりはまり、私の中の密かなブームになった。Nくんは気がつくとう「また後で来てしよう」と掘り出すことができなくても切り替えられるようになっていた。

☆「む」が好きMくん

Mくんはひらがな文字の並びを眺めいろいろなことを発見する。そしてこのときのブームは「む」の文字とむのつくことば。「むら」と「むね」、先生の名前や歌詞ボードの並びをみて「む」の文字を発見していく。よくみると「む」はおもしろい格好をしている。そして「む」というのは歌詞にはめったにつかわれないということがわかった。学部の教師みんな、新曲がでくると「む」さがしをしていた。「むらむら」「むちむち」「むずむず」「むにゅむにゅ」「むかむか」「むきむき」擬音語もたくさんあることも発見した。「ひらがな文字」のおもしろさ、をMくんから学び、みんなにひろがった。「む」を発見した時は「Mくんにいわなくては！」とMくんの喜ぶ顔を思い浮かべながら、教師はみんな走っている。

②学級活動の実践

☆ロープをつかって遊び場づくり「欲求を満たしながら、役割を担う」

Kは、9歳頃の発達で、規範もあり「みんなに注目されたい」「みんなをしきりたい」とリーダーのように命令したり、世話したりする一方で、「友だちよりもっと、特別にされたい」「私がえらばれたい」「愛情をかけてほしい」という思いが強烈で、「どっちをみんなで食べる？」「どっちの曲にする？」など学級活動の中で教

師が提案して選ぶような場面で自分の意見が通らないと大荒れ。水筒が跳んだり、机が倒れたり、一度マイナスな態度にでると手がつけれないくらい荒れることが頻繁であった。同じ年に一緒に入学したTも自分の意見が通らないとすぐに拗ね、時にはふたりで大げんかになることもあった。「みんなで決める」「相談」はクラス自治では大事なことだが、二人がこんな欲求をかかえて騒動になるのだったら、何の意味もないと、すっぱりやめた。Kには学級活動で遊ぶ、ロープを木の枝に結わえて張っていく仕事を担わせることにしました。大好きな男性の教師と朝の会までの時間に取り組むのです。ロープは重く、作業は大変だったが、ロープの結び方をきいたり、木に登ってロープを受け取ったり、手応えのある活動を大好きな先生と行うことで、気持ちが満たされていた。学級活動の時は、みんなの前で紹介されて誇らし気。活動にもスムーズにむかえた。Tくんは別の任務自転車隊長がある。これも教師と個別に関わりながら、みんなの分を準備し、コースを作る手応えのある活動である。「特別扱いされたい」「大人に甘えたい」の欲求は、中学部頃になると、ストレートにはでてこない。そこを見極め、クラスでの活動をつくり、仲間を見る目をひろげる。一筋縄ではいかないが、手応えのある活動と、大人の関わりで（振り回されず、でも甘えさせられて、時には叱る毅然とした態度）、本人が充実を積むということが、キーになるのだと実感した。

☆シャボン玉 ～ゆるやかにつながる～

「自分がつくるシャボン玉のむこうに友だちの姿がある」そんな緩やかなつながりでクラスの仲間を感じさせたい。5年前の実践。様々に工夫を凝らした道具で、5名の子ども達の「シャボン玉をつくる手応え」をさぐった。人が気になって、なかなか活動に集中できないKNに焦点をあてて授業を作っていた。液に浸してゆっくりと棒持ち両手をひらくと、とてつもなく大きいシャボン玉ができるという道具を開発し、彼女が道具操作で調整力をはっきすることで、外向きの心をぐっと内むきにし、自分の中に確かにできたという達成感を感じられるようにした。「そおーと、慎重に ゆっくりね、そーれ」となりの教師のかけ声を自分の腕の動きとつなげ、内言語化して、彼女は大きなシャボン玉をつくった。その時の晴れ晴れしい顔、彼女をみあげる教師の顔、おおきなシャボン玉に魅せられて秋の空をみあげる仲間の顔……。忘れられないショットである。彼女はそれからじきに一人で作れるようになり、いくつもいくつも秋の空にシャボン玉を飛ばした。このクラスには集団に入れない生徒が3名いたが、みんなシャボン玉に魅せられて、道具の楽しさの惹かれて活動を楽しんだ。ブランコの好きなRはブランコからみんなの様子を見ていて、頃合いがくると自分から活動を切り替えて仲間の場にやってきた。

以上 印象に残る例をいくつか記した。ここでもう一度本校で大事にしている「子ども理解」についてまとめる。

5. 子ども理解する上で大切なこと

(1) こどもをどんなまなざしで捉えているか

①子どもにとって自分がどんな存在となり得ているかを問い直す。

- ・子どもの楽しみ（没頭する世界）を共有し共感できる存在となり得ているか
- ・安心感、信頼感の育ちをみる→受け止め手（大人）で子どもの出し方はちがう。
- ・こどもの感受性VIEWにたてているか
 - 子どもをまるごと捉える
 - 安心感、信頼感があって、子どもは自分の要求が出せる。
 - 子どもの欲求をどう満たすのか 枠をどんなふうにつくるのか

②子どもがわくわくして心を踊らせるような活動（授業や遊び）をつくれているか

- ・手応えのある活動なしに子どもは主体性を発揮できない。→どこが手応えなのか
 - ・「ときめき」があり「ワクワク」を作り出せる活動、学校生活の流れがあるのか
 - ・生活の流れ、活動の流れ、リズム、子どもの心地よいを引き出せているか
 - こちらの押しつけになっていないか。子どもにとっての必要性はどうか。
- コミュニケーション的關係の中で捉え直す

③「どんな集団にしたいのか」自分の集団観を問いなおす

- ・一人ひとりの思いをどんなふうにくみ取り、どんなふうに関与させるのかは、教師の集団観が大事になる。
- ・集団の中で生まれるドラマをどんなふうに関与させるのか
→ 集団の変容が個の変容を生む

④教師は自分の「観」を自覚して、それを見直しながら子どもを見るまなざしを育てる。

- ・子どもを見る教師もまた、発達要求をもった一人ひとりの人間である。
- ・何を問題だと捉えているのか、「自分は子どもに何をさせたいのか、どうなっていてほしいと思っているのか」聞き取ってもらい、語ることで、それぞれの「観」を磨いていく
→ 教師集団が対等平等の関係で論議できるか → 思いを出し合いながら自己変革していく
→ 「正解！」があるわけではない。「自分の価値観」がどこからきているのかを見直す
- ・教師のコミュニケーション的関係をはぐくみ教師自身の「自分の軸」をつくっていく。

⑤子どもの育ちの背景をみることができるか ～自分の価値観を問い直す～

- ・子どもたちが何を大事にされて育ってきたのか
- ・保護者の思いや願いがどこにあるのか。子どもとのズレがどこにあるのか
- ・その子特有の「感じ方」、「わかり方」感受性を大事にされてきたか
→ 「みんなと同じようにする」ことを目的とされがち
→ 「いやです」「やりたくない」「わからない」「いきたくない！」が大事にされてきたか
☆ 教師が促すと嫌いだっただけでも 少し顔をしかめていましたが、
いやがらずに自分から飲めるようになります
「感情コントロール」ということば

※それを自分はどういう観点からみてきているのか 問題意識を常に持つ

(2) 教師の子どもを見るまなざしをどう育んできたか

①週に1回の学部会・学部研で子どものことについて論議する

- ・自分の問題と思っていることを言葉に紡いで論議する中でなにか問題なのか意識する
「うまくいえないけど・・・」「つたわるかどうかわからないけど・・・」
「あなたはなんでそう思うの」などと問われ、混沌とした思いを言葉にしながら整理する

②教育実践カルテをみんなで論議して担任が書き上げる。

- ・「認識」「身体」「手指」「集団」「生活習慣」など様々な切り口から、子どもを捉え、人格発達子どもまるごとを捉えられるようにする
「どうしてそう思ったのか」エピソードとともに語り、その切り取りとともに記す。
→ エピソードは教師自身の中をくぐって生まれてくる。教師自身がどんなことを思っているのかの気づきが大事。自分が何を見てそう思うのか
→ どんな「観」を自分はもっているのかの捉え直し。

6. 子ども観・集団観を問い直しながら

共感的自己肯定感を育むためには、一人ひとりの子どもを丸ごと捉えることが必要である。そこでは発達や障害の理解が欠かせないが、それだけではなく、子どもの内面に寄り添うことが大切である。白石正久先生は著書「発達とは矛盾を乗り越えること」の中で「発達は様々な機能や能力が総体としてつながっている過程であり、その連関（つながり）には、感情や自我という人間的な心の働きも包み込まれているのです。連関を『ありのま

ま、まるごと』とらえることは、発達を理解する視点として大切なことです。『ありのまま、まるごと』をとらえようとすることは、自分の目では子どもの中にまだ見えていないことがあるということを実感することでもあります。見えていないことの全てを探ろうとする『全面性への要求』をもつことは、実践の中にある価値ある事実を拾い集めて、その中に法則性を見出し、実践を科学に高めていくために求められる姿勢でしょう」と述べている。

どんな行動にも子どもにとっての必然性と願いがある。教師は社会的規範や目標を押し付けるのではなく、その願いを子どもとともに探り、発達要求として育むことが大切である。できない自分、ネガティブな自分を受け止めてくれる大人や安心して自分が出せる集団があつて初めて、子どもたちは自分を表現し、他者の思いを受け止める素地ができてくる。どんな集団をつくっていくのか、対等・平等な民主的な集団づくりを進めていく教師の集団観と集団づくりの実践が問われている。

「子どもは発達の主人公」、「発達は要求から」と言われる。子どもは集団の中で成長発達するということは、私達が日々の実践の中で確かめてきたことでもある。子どもの発達要求には、自分がこうしたいということだけではなく、誰々のようにになりたい、誰々と一緒にこんなことがしたい等、他者や集団の存在が大きく関わっている。友だちと一緒にだからこそ楽しいし、友だちの活動する姿からわかる世界が広がるといういわゆるプラス面だけでなく、友だちとのぶつかり合いから生まれる矛盾に直面することで、子どもたちは自分の思いに気づき、新たな自分を模索していく。

その過程で、友だちの思いにも気づき、お互いの価値観をぶつけあいながら合意をつくりだすためにやりとりする力が育まれ、友だちとつながって新しい世界にチャレンジするようになっていく。ひとりひとりの子どもと彼・彼女を取りまく集団の発達課題を読み取り、それに応える教育内容を用意することは教師の大きな責任だろう。

7. 豊かな文化を子どもたちに

教師と子ども、子どもどうし、教師間、教師と保護者のコミュニケーション的関係は、手応えのある活動の共有無しには成立しない。どんな活動を共有するのか。学ぶ喜び、人とつながる喜びが味わえるような豊かな文化を子どもたちに伝えたい。それには、文化の一方的な押しつけではなく、子どもの発達課題をとらえた文化の教材化が必要である。

文化は、それを享受する人々が常に自分に引き寄せて再創造していくという性質を持ち合わせている。このことは教育にも当てはまる。こどもに文化を伝えることは、既存の文化をこどもに教えこむことではない。教材となった文化を、教師とこどもたちが新たな教室文化として再創造していくことなのである。そこには教師とこども相互のコミュニケーションが不可欠である。子どもは新しく題材に臨む時、新しい価値をもった世界に入り、その固有な価値を表現するために必要となる新しい能力に出会う。その時、子どもたちが提示された教材の本質的な価値を理解し、楽しみ、時には矛盾に直面し、新しい意欲に目覚めたりして、内面を駆りたてその教材を享受していくことが必要なのである。教師とこどもがまずは教材を享受すること、これがないと、授業は教師が新しい価値をこどもに伝達するという一方向の関係にとどまり、教師とこども相互のコミュニケーションが成立したとは言えない。子どもたちの発達課題を読み取って教材化したものを、子どもたちの思いや内面に寄り添って共感、共有していく教師の役割は、子どもたちの人格発達に決定的な影響を及ぼす。子どもの人間的な成長を捉えながら自分自身も成長していく喜びが、コミュニケーション的労働である教師というしごとの醍醐味だろう。教師自身が集団での論議を通して今の自分の枠組みを破り新しい自分を作り替えていくような学びをしながら、自分の実践の価値や意味を問い、表現していく営みが必要となっている。そして、そうした教育実践の価値や意味を教師同士、教師と保護者で共有することができれば、子どもも教師も保護者も、全ての人が自己変革しながら成長していける学校になるだろう。

8. 教師集団の在り方

～歴史を踏まえ、コミュニケーション的関係に基づいて～

今、多くの学校で教員にランク付けがなされ、教員間のつながりが分断され、トップダウン方式による学校運営がなされようとしている。「職員会議で、意見が言いにくい雰囲気がある」「事務仕事に追われて忙しすぎて子どもの話ができない」などの声もきく。教育基本法が改悪され、憲法まで手をつけようとしている情勢がある。新指導要領が改訂され、教員のしほりもきつくなっている。職員会議が論議する場でなく「伝達機関」になってしまっているなど、そんな中で本校のシステムのあらたな価値に気づく。

本校は大学の附属校として、教育の自治が一定守られた中、独自の教育研究を進めてきた。民主的な学校運営と、教師集団づくりを目指してきたが、完成されたものではないし、その都度課題も生まれている。それは、一人ひとりの教師が自由に教育実践することを無条件に保障しているものではない。これまで述べてきたように、一人ひとりの子どもの発達課題と、集団の発達課題をとらえた上で、どのような題材を教材化していくのか、そしてその題材と実践が子どもたちにとってどのような価値と意味があったのかを絶えず検証していくことが大切である。これは個人の力でできるものではなく、集団の真摯な論議と相互批判と合意形成によって可能になるし、こうした論議を通してのみ教師集団の教育的力量が高まることは、本校の教育実践の歴史を振り返ると明らかである。

障害者の権利条約24条は、教育を次のように考えている

- ・子どもたちが人間として尊重され、大切にされること
- ・それを通して自分自身の尊厳に気づき、自分や人を大切にしようとする人権意識を育てること
- ・自分の潜在的な能力を十分に発揮できる教育内容の創造
- ・自由な社会に効果的に参加することができるようにする

教育実践に迷った時、保護者との共通理解に迷った時、学校運営に迷った時、様々な困難はあっても、子どもたちが尊重され、潜在的な能力を十分に発揮できる学校を目指して取り組んでいきたい。

目まぐるしく変化している教育情勢の中で何を大切にするのか。教育において大切なことはくるくる変わるものではない。教員ひとりひとりには様々な考え方があがるが、教育実践や学校運営において、「こどもにとってどんな意味があるのか」をまず問うて、それぞれの場で方針を出すようにしていきたい。

教員ひとりひとりが、自分の思いを率直に出し合い、互いにコミュニケーション的関係を築き、よりよい教育実践をつくる努力を重ねていきたい。教師が情勢に流されず、軸を持つてものごとを考えることがとても重要である。本校では、教師みんなの声を反映できるような運営システムを長年かけてつくってきた。それはある面という点では非効率なことですが、教師の「観」を創るためにはどれも必要な物である

最後に本校で「教師が自分の「軸」をもつために本校で大事にしてきたことを述べたい。

9. 教師が自分の軸（それぞれの観）をつくるのに、本校で大事にしてきたシステム

～教師が豊かな「観」をつくる、社会観 願いと思いを～

①教師集団が自分の思いを出せる場があること（週に1回の学部会と学部研）

経験のある教師も経験が浅い教師も、対等な立場で言葉を「うまくいえないけど・・・」とことばを紡ぎ、他の教師の言葉に耳を傾け、自分の思いを確かにしていく。

②すべての教育活動の中で、その教育的価値にもとづくねらいを立て、それを論議する。

※将来のキャリアにどう役に立つかどうかではなく、その教科、行事の「文化の視点」「民主的な集団づくり」「子ども達の発達要求」とは、という原点にたつ。

③「授業「教材」」を評価し、それを教師集団で吟味する力をみんなで論議する中でつける

「ずれがなんであったか」

教材の文化性をしっかり見届ける。活動があっても文化がなしにならないように

④主指導と補助、担任と学部つき、行事の係などいろいろな役割を担い、それぞれで自治的能力つけ、自分の問題意識を持ちながら、気概を持って教師集団の中で力を発揮していく

⑤本校の変遷 歴史に学びながら自分の実践を見る

- ・なにがその時々の問題となっていたのか。そこに至るにはどんな理由があったのか。社会の情勢とすり合わせて考え、「問題意識」を持ち、それを教師集団に投げかける

本校を創ってきた先輩教師達、の実践の蓄積が本校にはある。過去の資料から、その時々の問題となっていたのか。そこに至るにはどんな理由があったのか。社会の情勢とすり合わせて考え、「問題意識」を持ち、それを教師集団で捉えていくことがこれからもっと大切になる。

2018年度研究推進委員会総括

I 今年度の研究

1. 研究主題とサブテーマについて

「コミュニケーション的関係がひらく障害児教育」

～生活・集団・内面・発達と障害をとらえなおす～

(1) 今年度の教師集団

新しいメンバーを加えて 研推委員会も新たなスタート

本校ではこの数年、教員の入れ替わりがはげしくなっている。本校に長く勤める教員が多い状況が続いていたのだが、本校での経験が長い教員が退職していき、新しい教員が増えるという世代交代が進んでいる。今年度は、継続の非常勤講師を含めて6名の新しい教員を迎えた。また今年度は学部をまたがっての教員の移動があり、どの学部も新しい顔ぶれで新学期をスタートさせた。そこでは、新しく赴任した教員の疑問やあらたに学部を入れ替わった教師の「気づき」が得られるであろう。新しい教員が増えて世代交代の時期になっている今、本校で「大事にしてきたこと」を丁寧に継承しながら、新しい視点を得て、さらに実践を発展、充実させていくことが課題となっている。

(2) 研究の方向性

世代交代が叫ばれている中で、本校が理念とするコミュニケーション的関係を大事にした教育について実践を通じて、発信していくことが研推委員の大事な役目となる。特に来年は50周年の節目の年である。新しい教員が多い中では「コミュニケーション関係」がどんなものなのか、それより以前に本校の教育ではなにが大事にされているのかについてどの学部も共通理解を深める必要があった。

本校の歴史と障害児教育の歴史を重ねながら・・

小 学童期

大人と身体的にも精神的にも密着しながら世界を見せてくれる大人に出会う。
すっぱりと愛される気持ちの良さ
「満たされた」「このままでいい」を
たっぷり味わわせてくれる大人

中 思春期

・今までの自分を壊して新しい自分へ
葛藤、迷いをどうつきあうか
手応えのある活動、情感豊かな交流を
どう生み出すのか

高 青年期

学校生活の最後、社会へ
「焦がれる 存在」モデルとしての大人
の存在、「仲間との連携・連帯」
「主権者」としての自覚

・共有、共感世界をつくる教師の存在は、子どもたちの人格発達には欠かせない。教師自身も子どもと文化をともに味わい、楽しむことで、自身の感受性を磨き、人間的に成長していく。

→それぞれの個性、持ち味が大事にされる。

※子どもの「わかる」「できる」、共有世界、をつくるのに大人の役割について。分析する。子ども達にどんな世界を見せるのか。何にどう寄り添い 対峙して響かせるのか

・小、中、高等部で寄り添い方はちがう

教師の観を磨く

「自分づくり」が進む自身が思考する (言葉の世界を豊かに)

研究推進委員長としては、昨年度に引き続き、「教師の有り様」について深めてほしい、という提案をしてきた。「コミュニケーション的関係の土台となるのは、対等・平等な人間関係である。この関係は、子ども同士だけでなく教師と子どもにも当てはまる。具体的に言えば、教師は子どもの意見表明権を大切にしなければならない。コミュニケーション的关系を積み上げながら、子どもと一緒に教師も育っていくという姿勢が必要なのである。「子どもを主人公に」或いは「こども主体に」という言葉はどこの研究会にいても聞く言葉だが、教師の役目はなんだろうか。「見守る」「支援」と言う言葉に観察者の感じを受ける。本校の中で教師は「活動、文化を創り出す主体である」今一度、コミュニケーション的関係の「教師は教育の主体である」ということの意味、教師とは何をする存在なのかを確認する必要があると感じたからである研究協議会のない今年、のびのびと主体的に各学部で研究を展開させ交流していくことを提案した。各学部とも授業実践研究やカルテ検討の中でこの提案を受けまとめてきた。

(3) サブテーマ 生活・集団・内面・発達と障害をとらえなおす

本校ではここ数年「コミュニケーション的関係がひらく障害児教育」というテーマのもとで、小学部では自我の育ち、中学部では自分の捉え直し、高等部では自分づくりに課題意識を持って、学部ごとに教育研究を進めてきた。自我や自分づくりを進める中で大きな課題となったのが、人との信頼関係の構築と共感的自己肯定感の育成、他者と達成感・充実感のある活動を共有することである。今年度はどの学部も学校生活の拠点である「学級集団づくり」の研究を進めてきている。

※1学期全校研では、各学部の実態から共通して読み取れる課題に次のようなものがあることを確認した。

- ・大人を中心に人との信頼関係を育み、大人に自分の思いを意味づけてもらって、自分の思いに気づき直し、自分の意思をはっきりさせること
- ・楽しい活動に取り組み、自己充実を土台に、欲求を要求へ発展させていくこと

→自分を解放させていく

- ・「自分の要求を実現させていくことを通して、友だちと出会い、つながっていくこと
- ・「仲間の中で自分がどうあるべきか」、また「仲間集団としてどうありたいか」集団の中の一員としての願いを持てるようにしていくこと

自己の解放

行動や意志が抑制されていては正しい要求、つぎの発達にステップのための力となるような要求にはならない」「子ども達の意志や行動が抑圧されたまま内にある潜在的な力の発達は期待できない」

田中昌人

発達は今までの自分の価値観を崩し新しい自分を築くことだといわれる。そこには自分と人への信頼と、今までの自分を崩すに足る価値ある活動との出会いが必要である。自分づくりと自分崩しを交互に進めていくことで、ありのままの自分でいていいのだと思える共感的自己肯定感をつくっていきたい。どの学部もその願いを持って、「学級づくり」「集団づくり」を進めているが、認識的に幅がある集団、それぞれが障害や生育からくる独特の感性を持っている子ども達の「集団づくり」はとても難しい。本校の学級集団は発達の状況も年齢もちがう異年齢の縦割り集団である。その中で個性的な実践を新しい教員集団で、研究推進委員をリーダーとして、つくっていくことができた。

(4) 各学部の実践研究について

○各学部の研究重点課題

【小学部】「人と豊かに内面を育む小学部時期の教育を探る」

～自我の育ちを大事にした生活づくり、集団づくり～

【中学部】「中学部時期の生徒の自分づくりについて」

キーワード～「個と集団の変容」「集団づくり」～

【高等部】「豊かな人格をめざす、高等部教育」～仲間とともに進める自分づくり」

どの学部も大学の先生に授業をみていただき、示唆をいただくなど、積極的に問題提起しながら、実践研究を進めてきた。また2学期は小学部の実践を全校で学習して論議して学びを深めた。

詳しくは、各学部のこの後の実践報告に譲る。

(6) 今年度の全校研・公開研について

全校研として今年度は3回持った。

●全校研① 今年度の研究と各学部の研究の内容を知り合う

○今年度の研究と方針 7月25日(水)

13:30	35	13:55	14:50	15:00	15:55	16:05	17:00	15
開 会 の 挨 拶	副 校 長	委員 長 方 針 案 殿 垣	小学部から 研推 柴田 司会：佐藤 記録：本田	休憩	中学部から 研推 殿垣 司会：本田 記録：大竹	休憩	高等部 研推 岡宗 司会：大竹 記録：佐藤	校 長 先 生 よ り

報告30分、質疑25分 (目安として)

●全校研② : 小学部の実践研究から学び、全校で論議し深める。12月21日(金)

13:00	13:15	15:15		16:20	17:00	17:15		
開会の挨拶	研究推進委員会委員長より	司会：大竹	休憩	司会：大竹	グループ討議③発表	休憩	討議のまとめ：司会殿垣	閉会の挨拶校長先生

○研推からの報告
司会：大竹
①実践報告No.1
KKについて柴田
②質問
③質問に答える

○研推からの報告
司会：大竹
①実践報告No.2
IEについて柴田
②質問
③質問に答える

①論議の柱発表
②グループ討議
③グループの発表

①グループの発表を受けて
小学部 研推から

グループ編成 4班に分かれる：管理職3 高10 中9 小9

	リーダー	小学部	中学部	高等部	
A 8名	岡宗	森田 松本	小山 金川	井上 江上、	松永
B 8名	大竹	平沢、岡本、 島田	備瀬	霜浦 森本	西堂
C 8名	佐藤	萱田 長谷川	豊田、高岡	本田、山口 黒川	
D 8名	殿垣	湯山、柴田	北村、森脇	下木 竹川	渡部

- ・個別に対応している小学部3組の2名の事例について子どもの見方、分析、そして活動づくりにいたる経過を知って論議し、あらためて小学部時代に大事にすることを探る

E：教師1対1で「生活づくり」をしているその中味から

K：第二次性徴にさしかかり、今までとは違う姿をどう分析するのか

→「水遊び」（トイレの便器の中でも一人こもってする）を大人と共有でき

●全校研③ 今年度の研究のまとめ 3月22日（木） 13：00～17：15

- ・各学部でテーマがどのように追求されたか
- ・各学部の具体的な実践を通しての報告について疑問を出し合い協議する
- ・各学部の取り組みの成果と課題を共有する

13:00～ 13:30 14:40 14:50 16:00 16:10 16:55 17:15

開 会 挨 拶	研 推 報 告 殿 垣	高 等 部 報 告 ・ 協 議 岡 宗 司 会 ： 佐 藤 記 録 ： 大 竹 報 告 45分 質 疑 応 答 25分	休 憩	中 学 部 報 告 ・ 協 議 殿 垣 司 会 ： 大 竹 記 録 ： 本 田 報 告 45分 質 疑 応 答 25分	休 憩	小 学 部 報 告 柴 田 司 会 ： 本 田 記 録 ： 佐 藤 報 告 45分	閉 会 挨 拶 教 頭
------------------	----------------------------	--	--------	--	--------	--	--------------------------------

※各学部 報告45分 質疑25分を目安に

●学術講演会

○楠凡之（北九州大） 8月24日（金）

発達保障実践の創造～

「9、10才の質的転換期」に視点を当てて

参加者：46名（外からの参加者11名）

時程

11：30～ 特別委員会 楠先生と懇談
13：30～ 受付
14：00 副校長挨拶 司会 殿垣
14：05～ 講演 楠先生
途中 ～休憩 15分
16：35～ 質疑・感想
16：55 校長 あいさつ
17：00 閉会

○講演前までの準備

楠木先生に本校の資料を送り、懇談を持って本校の高等部の様子をお伝えし、講演の内容を考えていただいた。

「認識と要求の育ち」にギャップのある生徒の躓きについて 話してもらう

→自治的な取り組みについて

「子どもたちの要求を育む」「仲間の中で育つ」

→保護者には声をかけない

高等部でその時期の課題を抱える生徒の事例

- ・楠先生にはビデオを送って、示唆をもらえるような内容を講義してもらうのはどうか

→高等部の学級活動を撮ったビデオ、去年の中学部のビデオなどを送り事前に見ていただき、本校の様子や取り組んでいる内容を少し知っていただいた上で講義をしてもらえるようにした。

7/28（教職員と保護者のつどい）楠先生の講演後に懇談（岡宗、殿垣）

→全生研（神奈川全国大会で 気になる保護者 分科会 レポート論議（西堂）

・前日の台風でJR線が不通になる不便な中を着ていただいた。

近江学園の実践の例も話されながら「発達保障」にも触れられていた。異質を大事にしながら、共同を創っていく過程が実践とともに語られた。講演の事例を聞きながら学部の「2次障害」の生徒について、今の実態、ねじれがどんな所に生じているかなど、いろいろと考えさせられた、など自分の実践と重ねて感想が多く寄せられた。

●渡部校長先生を囲んでの学習会 3月15日（金）

情熱を持った人間が歴史をつくる――源流としての糸賀一雄の思想と実践――

13:30～	13:35～15:15	15:20～
開会のあいさつ 松永	校長先生発表 70分 (映像も入れて) (休憩 10分) 質疑応答 20分	終わりの挨拶 西堂

・近江学園を創立した糸賀一雄の生涯を映像を交えながらお話ししていただいた。「障害児教育への業績という面では偉大な先生である。いろいろな困難もありながら、人と出会い、その時々迷いながらも誠実に生きてこられた糸賀先生の人柄に触れることができた」「糸賀氏が創ってこられた障害児教育、そのバトンを引き継いでいくことの重さを感じた。」「渡部校長の思いのこもった講演であった。」などたくさんの感想が寄せられた。

【今年度の全校研・研究会の 総括】

・全校研として総括を入れて3回、講演会は楠木先生と校長先生に来ていただいた。

歴史的に本校の存在の意味、異年齢集団や教育課程がどう位置づくかを、また障害児教育の歴史的変遷の中で本校の歴史がどんなふうにつながっているかも校長先生から学び意義深かった。50周年の節目にまた改めて深めていきたい。

「実践」「子ども理解」という点では、2学期の小学部の事例を扱った、全校研も含めて子ども達の「問題行動をどう捉えればよいのか」教師はどうあるべきかについて、論議し深めた。そこは楠木先生のお話の中での紹介された実践（9、10歳の質的転換期をどんなふうに捉えるのか）でも語られていた。「問題」を子どもの立場に立って見られるかその子の気持ちをイメージできるか。新たな学びを得て、本校で大事にしている「子ども理解」そして子どもの感じ方を大事にした実践について、もう一度深めることができた。

方針案で記述したことを今一度確認したい

子どもを理解とは、子どもを標本のように見て分析するのではない。子どもに共感をよせ、どんな世界が見えているのか、イメージを豊かに膨らませるどう思っているのかを想像する能力がいる。

子どもも教師も一人ひとりが、「独自の感覚」、「感性」を持っている。本校の子ども達は、障害からくる制約もあり、また私たちにはイメージしにくい、「独特の感覚」や「感性」を持っていて、発達段階もそれぞれでその表現は様々である。独自の感性や感覚を大事にしてもらうことなしに、子どもは「自分を尊重された」とは感じられなく、「自己肯定感」を持つことができない。子どもを理解しようと思えば「子どもはどう感じているのか」「どんなふうに見えているのか」「なにを大人に訴えようと思っているのか」など教師はイメージをふくらませて考えていくことが必須だが、それには思考を凝らしているだけではわからない。「子どもが夢中になる世界を一緒にやってみる」ことが大事である。子どもは自分の感覚をいっしょに味わおうとしている大人に安心感を持てる。本校の子ども達にはいろいろなところでつきあう教師がいる。「その楽しさ」が大人の私たちに伝わったとき、本当の意味で共感ができる。あまりに独特すぎたり、あまりに突飛であったり自分にはない感覚で、「どこが好きなのか」「なにがいいか」わからないこともあるだろう。それでも「どこが楽しいのか」と探求心を持って取り組み、その楽しさがわかったときは大人の世界も広がる。

個人の「楽しい」は人と共鳴して共有しあって響き合うことで「自己の解放」にむかうのである。そうでなければ、単なる没頭になってしまう。同じことを繰り返しているからといって、それをその子の「楽しさ」だと理解してはいけないのではないか。

小学部の「風呂遊び実践」は、そのことを言い当てた実践であった。「水の世界に没頭している康Kくんは何かには憑かれているようなそんな感じだった。それを本人の世界にいるから、ご褒美として授業にがんばったらさせてあげる。でよいのか」それまで、教師が提案した「楽しいこと」には素通りで、水に縛られていた康之介くん、そこを開放したのは、大人がいっしょに楽しむ風呂遊び、大胆な発想であった。

今年度も研推委員会ではいろいろな学部の「子ども達の悩み」が語られた。小学部の実践はどの学部も、自分の学部の子供達と重ねて 共有できる中味であった。

教師それぞれが、子ども達の「楽しいこと」と出会い、また「楽しいこと」を子ども以上に深められたであろうか。子どもをわかろうと思えば、子どもを見る自分の目（感性、感受性）がどんなものか見直さなくてはならない。それには一人だけではできない。自分が何に問題を感じているのか、なにが許せないのか、何に困っているのか、誰かに聞き取ってもらうことで、自分の思いに気づくのである。また「楽しさ」をどう分析するのかは、非常に難しい。

子どもを都合よく解釈しないように、「楽しさ」「楽しい」で済まらずに、それはどんな感覚なのか、なにを感じるものなのか、子ども達がどんな活動出会って感じられるものなのか、の分析を今一度教師集団で行う必要性を感じている。「楽しい」を言い換えると、

「気持ちいい」「おもしろい」「自分の感覚が研ぎ澄まされる」「触れ合う」「受け止められる」「相手と共鳴する」「響いていく」

いずれにせよ、「ワクワクするような意表をつく」活動に、子ども達が主体性をもって「新しいものに出会う」ことなしには、この感覚は味わえないのではないかと。また、全校研（小学部実践）では、「保護者の思い」とのズレをどうするか、ということも話題になりました。子ども達の意見表明権、「主体性の発揮」ということを考えると、保護者の思いのズレがあったとしても、粘り強く「子どもを尊重する」という立場にたって私たちは伝えていく必要がある。

子どもが自分の生活、ひいては人生の主人公になるためには、どうしたらよいのだろう。わかりやすい環境をつくる。不安なものを取り除くだけでは子どもの主体性は発揮される。「自分はこうしたい」という願いが子どもの内面から湧き出てくることが、必要である。今年度の各学部研では「問題行動」（おとなにとって困った行動）に対して、集団の活動にどう参加できるか、或いはできるようにしなくてはという視点ではなく、限りなく個別の取り組みの中でその子の要求をつくりだし、意識化させるのかに取り組んできたとも言えるだろう。

一人ひとりの子どもが「主体性」を発揮するためには、何が必要かという視点で「教師の有り様」と教育内容を、もう一度見直すことが今大切になっている。

もう一度方針案を見直す。

★過去に実践から学ぼう →語り継ぐ人がいるうちに、過去の失敗からも学ぶ

★問題意識を持って大胆な実践を発信する。先駆的な実践に学んでいく

★子ども達の「主体性」を大事に 「楽しい」はなにかを探っていく

★保護者にも「権利としての主体であるのは子ども」ということを粘り強く伝え
いっしょに学んでいく

（7）子ども理解 ～教師それぞれの「観」を捉え直しをしながら～

1. こどもをどんなまなざしで捉えているか

①子どもがわくわくして心を踊らせるような活動（授業や遊び）をつくれているか

- ・手応えのある活動なしに子どもは主体性を発揮できない。→どこが手応えなのか
- ・「ときめき」があり「ワクワク」を作り出せる活動、学校生活の流れがあるのか

- ・生活の流れ、活動の流れ、リズム、子どもの心地よさを引き出せているか
→こちらの押しつけになっていないか。子どもにとっての必要性はどうか。
コミュニケーション的關係の中で捉え直す
→不安感を取り除けても、安心にするには「楽しい活動」とそれを用意して
一緒に楽しみ深めてくれる大人が必要不可欠

②「どんな集団にしたいのか」自分の集団観を問いなおす

- ・一人ひとりの思いをどんなふうにくみらせ、どんなふうに関係にかえすのかは、教師の集団観が大事になる。
- ・集団の中で生まれるドラマをどんなふうに関係にかえすのか
→集団の変容が個の変容を生む

③教師それぞれの観を自覚して、それを見直しながら子どもを見るまなざしを育てる。

- ・子どもを見る教師もまた、発達要求をもった一人ひとりの人間である。
- ・何を問題だと捉えているのか、「自分は子どもに何をさせたいのか、どうなっていてほしいと思っているのか」聞き取ってもらい、語ることで、それぞれの「観」を磨いていく
→教師集団が対等平等の関係で論議できるか→ 思いを出し合いながら自己変革していく
→「正解！」があるわけではない。「自分の価値観」がどこからきているのかを見直す
- ・教師のコミュニケーション的關係をはぐくみ教師自身の「自分の軸」をつくっていく。

④子どもの育ちの背景をみることができるか ～自分の価値観を問い直す～

- ・子どもたちが何を大事にされて育ってきたのか
- ・保護者の思いや願いがどこにあるのか。子どもとのズレがどこにあるのか
- ・その子特有の「感じ方」、「わかり方」感受性を大事にされてきたか
→「みんなと同じようにする」ことを目的とされがち
→「いやです」「やりたくない」「わからない」「いきたくない！」が大事にされてきたか
☆教師が促すと 苦手なたまごに少し顔をしかめても、いやがらずに自分から手を付けました
「感情コントロール」ということば
※それを自分はどういう観点からみてきているのか 問題意識を常に持つ

(2) 教師の子どもを見るまなざしをどう育むのか

①週に1回の学部会・学部研で子どものことについて論議する

- ・自分の問題とされていることを言葉に紡いで論議する中でなにが問題なのか意識する
「うまくいえないけど・・・」「つたわるかどうかわからないけど・・・」
「あなたはどうか」「なんでそう思うの」問われながら混沌とした思いを言葉にして整理する

②教育実践カルテをみんなで論議して担任が書き上げる。

- ・「認識」「身体」「手指」「集団」「生活習慣」など様々な切り口から、子どもを捉え、人格発達子どもまるごとを捉えられるようにする
「どうしてそう思ったのか」エピソードとともに語り、その切り取りとともに記す。
→エピソードは教師自身の中をくぐって生まれてくる。教師自身がどんなことを思っているのかの気づきが大事。自分が何をみてそう思うのか→どんな「観」を自分自身はもっているのかの捉え直し

③ともにリアルな体験をくぐって教師も成長する。

- ・批判されて落ち込んで、褒められてうれしくて「問題はなにか」を突き詰めて考える

6. 教師集団の在り方

～歴史を踏まえ、コミュニケーション的関係に基づいて～

豊かな教育実践は、集団の真摯な論議と相互批判と合意形成によって可能になるし、こうした論議を通してのみ教師集団の教育的力量が高まることは、本校の教育実践の歴史を振り返ると明らかである。世代交代の中で、豊かな意見交換の場、論議の場を保障していくことが、さらに大事になる。

障害者の権利条約24条は、教育を次のように考えている

- ・ 子どもたちが人間として尊重され、大切にされること
- ・ それを通して自分自身の尊厳に気づき、自分や人を大切にしようとする人権意識を育てること
- ・ 自分の潜在的な能力を十分に発揮できる教育内容の創造
- ・ 自由な社会に効果的に参加することができるようにする

教育実践に迷った時、保護者との共通理解に迷った時、学校運営に迷った時、様々な困難はあっても、子どもたちが尊重され、潜在的な能力を十分に発揮できる学校を目指して取り組んでいきたい。

目まぐるしく変化している教育情勢の中で何を大切にするのか。教育において大切なことはくるくる変わるものではない。教員ひとりひとりには様々な考え方があがるが、教育実践や学校運営において、「こどもにとってどんな意味があるのか」をまず問うて、それぞれの場で方針を出すようにしていきたい。

教員ひとりひとりが、自分の思いを率直に出し合い、互いにコミュニケーション的関係を築き、よりよい教育実践をつくる努力を重ねていきたい。

II. 今年度の重点課題について

(1) 「コミュニケーション的関係がひらく障害児教育」の本の内容の理解を進めること

- ・ 具体的な授業実践を通して、本の内容についての共通理解を進めていく
- ・ 実習要綱の各学部の授業のねらいと小中高のつながりについて、昨年度の研究推進委員会で論議検討を進める。教科の系統を教師が学びながら、どんな教材をもって実践していくのか、検討を進めたい。本校の歴史を学びながら、深めていく

総括

高等部、小学部で学部研で用いた。ものづくり「目的意識をもちながらわかる力を発揮すること」や、友だちや先生との共感応答関係の中での「できる力」が大事であることなどを確認した。どの学部もカルテ検討、「授業作り」「教師の役割」などの論議の中で、本の内容を深めることができた。

(2) 子どもの共通理解を図っていく力量を高めるために、「発達」について学習を進めていく

- ・ 発達についての学習や新版K式の検査実施等、各学部を中心にすすめる。
- ・ カルテ検討では、発達の視点を持って子どもの実態を分析することを大切にする。
- ・ それと同時に、教師の働きかけや課題設定が妥当なものであるか、発達の視点を持って論議する。
- ・ 神戸大学大学院赤木先生の院生との共同の取り組み

総括

それぞれの学部で、今年度も主に教育実践カルテ検討や事例研究を行う中で、発達について学んできた。カルテや事例研などは「子どもの姿、エピソード」から実態や課題が語られるので、それをどういう視点で分析するのか、何を柱に論議していくのかは、研推のリーダー的力が求められる。

どの学部も子ども達の「わかり方」「子どもの見え方」「発達段階」を押さえて、論議を展開している。活動を楽しんでいたり、逆に入れなかったり、という子ども達の姿から、「授業の内容」「題材の意味」「大人の働きかけ」などがどうであったかを「発達」という視点で、導き出すことが大事である。新しい先生が多くなるのでその視点をしっかりと押さえたい。今年度も赤木ゼミの院生が、小学部の子どもの発達をするために来校して、

発達検査を行うことができた。

(3) 福祉や教育を巡る情勢と課題を学び、教育研究の方向を確かにすること

- ・教育・福祉を巡る情勢については、研究推進委員会を中心に分析する。各学部でもできるだけ学習会を持つ。
- ・特に、障害者の権利条約とキャリア教育について学ぶ
- ・新指導要領について学ぶ

総括

今年度は7月に進路指導学習会を行った。進路指導委員長の松永先生に「進路の手引き」を作っていただき、それをもとに学習した。40分という短い時間であったが、充実した学びになった。とても好評で、また継続して学びたいと言う声があがっている。また次回につなげたい。

新指導要領については2017年次々に公表されて、実施は2020年からである。今年度高等部の学習指導要領が新しく出た。来年度は研究協議会もあるので、主体的に学んでいきたい。「障害者の権利条約」「キャリア教育」について今年度、学習会などは持てなかった。それぞれ、学習会や夏の自由研修などでは学んでいる。また学部研でも話題にできている。

(4) 教育実践についての共通理解を進め、本校の実践をまわりに発信していく

- ・校内研究会、授業研究会、テーマ別研究会等を多様な形で実施し、学習を深めながら実践交流、検討をする。

明石市内特別支援学級初任者研 8/20(月)

学術講演会 楠凡之(北九州大) 8/24(金)

総括

実践シリーズは持てなかった。来年度は持ちたい。

- ・参加した人の感想では「特別支援教育」の大切にしていることがよくわかった、子どもへの向き合い方、個別の指導計画など疑問に思っていることが講義をきいたことですっきりとした。講義がきけてよかったというものが多かった。特別支援教育で大事にしなくてはいけない中味は伝わったようであった。
- ・やはり「教育実践シリーズ」とは分けて考えたほうがよいのではないか。
- ・実技の感想もあり、浮き輪の教材の意味は伝わったようであるが、初任者研で体育担当でない先生達に実技をする意味があるのか疑問である
- ・楠先生の講演は、他校から参加された方からは、今後の実践に役立つ話がきけたと好評であった。ASDの子ども達へ配慮を実践例も用いて、ていねいに語っていただいた。
- ・講演前には「高等部の保護者との問題について」特別委員会に加わっていただき、今後の対応について、アドバイスいただいた。いろいろな保護者の事例から本校の事例を読み解いていただき、新しい視点ももらえ、有意義な会になった。

(5) 本校に在籍するASDの子どもたちの教育内容を創造すること

- ・学部研究を中心に論議を深めていく。
- ・障害をどのように捉えるのか、人格発達をどのように捉えるのか等について、講師を招いて学びながら教育内容を創造し発信していく。
- ・障害特性について学びながら、彼らの困難や悩みに寄り添う実践を積み上げ、「自分づくり」をすすめる実践へとつなげる。

総括

どの学部でもASDの子ども達が在籍している。ASDの子ども達は、特に発達段階だけでは押さえられない、

今までの生活経験からの二次障害の特性が表れ、読み解きが難しい。今年度、楠先生を招いて「発達保障実践の創造－近江学園の生活指導実践からの示唆－」9、10歳の発達段階を示す生徒のつまづきについて～講演していただいた。高等部では学部での実践研究を事前にお渡しして問題になっていることについて事前にお伝えした。講演では、事例をもとにわかりやすく説明していただけたこれからも障害特性について学びながら、彼らの困難や悩みに寄り添う実践を積み上げ、「自分づくり」をすすめる実践へとつなげていくことを大事にする。

(6) 地域との連携を探ること

- ・明石地域自立支援協議会の発達支援部会や就労部会、明石Eネット、就労支援施設の見学（明石ホーム、明石市障害児学級・学校担任者会学習会）、神戸市知連等に参加し、明石・神戸地域の障害のある乳幼児の状況や、卒業後の進路や福祉就労状況についての情報を得る。
- ・再編成された明石地域自立支援協議会に参加し、情報を得る。
- ・東播特別支援教育連絡協議会は、校長や教頭が集まって課題や各校の状況を協議している。あわせて参加していく。

明石市教委との連携：教育実践講座、教育相談活動

総括

東播特別支援教育連絡協議会など、いろいろな可能な限りいろいろな会議や研修に参加してきた。明石市内の栄養士の会議も本校で行った。

今年度は夏休みに。高等部の進路指導委員会が中心になって、「卒業生の進路を見学する計画」を企ててもらい、小中学部の教師も大勢参加し進路先を見学した。コースも工夫されており、実際に卒業生の働いているところを見学して、多くを学べたと好評であった。来年度につなげていきたい。

(7) 大学との連携を図ること

- ・発達科学部の先生方との連携を深めていく。発達科学部だけでなく、他学部の先生、保健学科や医学部とも連携を計る。
- ・教職実践演習講義（幼小2時間、中高2時間）を担当する
- ・科研費の申請

総括

どの学部も大学の先生をお迎えして授業研究を行い、示唆をいただいている

奈良教育大学越野先生を高等部に神戸大から渡部先生を中学部に、赤木先生を小学部にそれぞれお迎えし、一緒に授業研究を深めた。赤木先生とは、ゼミの院生に小学部児童の発達診断にきてもらった。

神戸大学発達科学部人間形成学科教育論コース木下ゼミ4年生の学生からは、卒業論文協力の依頼を受け、小学部での観察、取材の協力をした。神戸大の山根先生は2学期、吉田圭吾先生には3学期に来校していただき、学習会を持った。あらたに神戸大学保健学科のつながりもできた。保健学科より木戸研究部長、種村教授が来校して、今後の研究について論議した。

昨年から引き続いて、医学部の臨床実習、6年目になる教職実践演習4時間は、継続しての取り組みになっている。

科研費申請には今年度は11名が応募した。

- ・障害特性について学びながら、彼らの困難や悩みに寄り添う実践を積み上げ、「自分づくり」をすすめる実践へとつなげる。

(6) 地域との連携を探ること

- ・明石地域自立支援協議会の発達支援部会や就労部会、明石Eネット、就労支援施設の見学（明石ホーム、明石市障害児学級・学校担任者会学習会）、神戸市知連等に参加し、明石・神戸地域の障害のある乳幼児の状

況や、卒業後の進路や福祉就労状況についての情報を得る。

- ・再編成された明石地域自立支援協議会に参加し、情報を得る。
- ・東播特別支援教育連絡協議会は、校長や教頭が集まって課題や各校の状況を協議している。あわせて参加していく。

明石市教委との連携：教育実践講座、教育相談活動

総括

東播特別支援教育連絡協議会など、いろいろな可能な限りいろいろな会議や研修に参加してきた。明石市内の栄養士の会議も本校で行った。

今年度は夏休みに。高等部の進路指導委員会が中心になって、「卒業生の進路を見学する計画」を企ててもらい、小中学部の教師も大勢参加し進路先を見学した。コースも工夫されており、実際に卒業生の働いているところを見学して、多くを学べたと好評であった。来年度につなげていきたい。

(7) 大学との連携を図ること

- ・発達科学部の先生方との連携を深めていく。発達科学部だけでなく、他学部の先生、保健学科や医学部とも連携を計る。
- ・教職実践演習講義（幼小2時間、中高2時間）を担当する
- ・科研費の申請

総括

どの学部も大学の先生をお迎えして授業研究を行い、示唆をいただいている

奈良教育大学越野先生を高等部に神戸大から渡部先生を中学部に、赤木先生を小学部にそれぞれお迎えし、一緒に授業研究を深めた。赤木先生とは、ゼミの院生に小学部児童の発達診断にきてもらった。

神戸大学発達科学部人間形成学科教育論コース木下ゼミ4年生の学生からは、卒業論文協力の依頼を受け、小学部での観察、取材の協力をした。神戸大の山根先生は2学期、吉田圭吾先生には3学期に来校していただき、学習会を持った。あらたに神戸大学保健学科のつながりもできた。保健学科より木戸研究部長、種村教授が来校して、今後の研究について論議した。

昨年から引き続いて、医学部の臨床実習、6年目になる教職実践演習4時間は、継続しての取り組みになっている。

科研費申請には今年度は11名が応募した。

（文責／殿垣亮子）